

# スミス再生産論と社会認識（下の2・完）

野 沢 敏 治

1. 課題の設定
2. 先行的蓄積論が示唆するもの
3. 個別的資財の分析 （本誌30巻1号）
4. 社会的総資財の分析
5. 農工分業と社会的再生産過程
6. 構成価格と社会的再生産過程 （30巻3号）
7. 生産的労働の認識視座 （30巻4号）
8. 蓄積と拡大再生産——国家論を展望して——（本号）

## 8. 蓄積と拡大再生産——国家論を展望して——

スミス蓄積論の課題はなにか。それは、資本蓄積の経済的機構の解明をつうじて、文明社会の普遍的富裕という事態を理解することである。そして、資本蓄積論を市民社会形成論として再認識し、国家を批判的に考察することである。スミスは蓄積論で、いままでの再生産論の論理次元ではみられなかった新論点を多数提供する。階級の再編、消費の意義、流通の再考察と流通必要貨幣量の問題、労働力と生産手段に要求される新たな質、合理的管理者としての資本家、「節約」の意義の拡張、国家批判、等々。以上の新論点の提示とその展開のことごとくにおいて、スミスは重商主義的蓄積を批判するのであり、重商主義国家を批判するのである。そして国家を市民社会に従属させるのである。国家のブルジョア的機能と国家の実在的構造との関連が固有に問われると

---

原稿受領日 1981年5月6日

いうことを、問題としてのこしながら。

スミスにとって蓄積は生産資本の蓄積であり、貨幣資本の蓄積ではない。また蓄積の主要契機は資本家が浪費を排して節約することにおかれる。節約は重商主義批判の観点からすれば、蓄積の直接的にしてもっとも主要な契機である。ところでその重要性において劣ることはないが従来の研究史であまり顧みられなかった契機がある。それはつぎのようなことである。スミスは消費者の奢侈的支出が生産拡大に役立つ事実を知っていた。また、彼は、生産資本の蓄積がたんに消費の禁欲にのみでなく、資本家による経営努力や流通の整備にもかかわることをいたるところでとりあげているのである。これらは蓄積の副次的で実質的な契機であって、蓄積の全体過程を描くときに問題となるであろう。

#### A. 蓄積の直接的契機

年生産物 $W'$ は物的には生産手段と消費手段とからなり、価値的には資本価値と剰余価値の合計であった。ところが、前々稿で解明したように、社会全体の再生産を過程的に追跡してゆくと、年生産物は物的には個人的消費財に収斂し、価値的には各階級の収入価値の合計に等置されていった。その年生産物がどんな割合で誰によって消費されるか、これが蓄積論展開の出発点である。この出発点にたつとあらたな理論的風景があらわれる。

「ある国の土地と労働の年々の生産物のなかで資本を回収する部分が、生産的な人手以外の者を扶養するために直接使用されることはけっしてない。それは生産的労働の賃銀だけを支払う。利潤または地代のいずれかとして直接に収入を構成する部分は、生産的な人手であろうと不生産的なそれであろうと無差別に扶養するであろう。」<sup>(1)</sup> 「生産的労働者も不生産的労働者も、さらには全然労働しない人々も、そのすべてはその国の土地と労働の年々の生産物によって等しく扶養されている。」<sup>(2)</sup>

(1) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner. Vol.1, Clarendon Press, Oxford, 1976 (以下WNと略す)P.332. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』I, 岩波書店, 1969年, 525頁。

(2) WN, Vol. 1, p. 332. 邦訳, I, 524頁。

第1篇の労働者・資本家・地主という階級区分とちがって、第2篇ではあらたに、社会は、生産的労働者・不生産的労働者・不勞所得者の各階級に大別される。区分けの基準は、年消費財の消費者が剰余価値生産と拡大再生産をおこなうかどうかにある。

第1は既存の生産的労働者 $W(A)$ 。

第2は当年度にあらたに需要された追加の生産的労働者 $w(a)$ 。

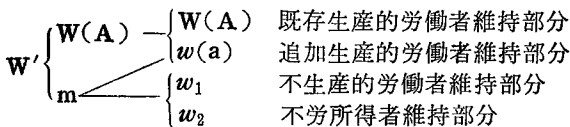
第3は不生産的労働者 $w_1$ 。

第4は「全然労働しない人々」、不勞所得者 $w_2$ 。

以上のうちで蓄積に直接関係する人間グループは $W(A)$ と $w(a)$ である。いま当年度期首の $W'$ が一定であるならば、 $W(A)$ によって消費される部分は前年度と同じであるから、蓄積は $W'$ の剰余価値部分 $m$ を $w(a)$ と $(w_1 + w_2)$ に分割することである。 $m$ で表示された消費財をその一部でよいから生産的労働者に「留保」すること、そうすれば節約＝蓄積の実がしめされる。

「年々に貯蓄されるものは、年々に消費されるものと同じように規則的に、しかもそれとほぼ同時期に消費されるが、それは異なる一群の人々によって消費されるのである。すなわち、富者が年々に消費する収入部分は、たいていばあい怠惰な客人や召使によって消費されるのであって、かれらは自分たちが消費するのとひきかえに一物もそのあとにのこさない。ところが、この人々が年々に貯蓄する部分は、利潤をえるためにただちに資本として使用されるから、同じようなしかたで、しかもそれとほぼ同じ時期に消費されるが、異なる一群の人々、つまり労働者、製造工および工匠によって消費されるのであって、これらの人々は、自分たちの年々の消費物の価値を利潤とともに再生産するのである。」<sup>(3)</sup>

蓄積の観点から、年消費財は次のように分割(分配)される。



(3) WN, Vol. 1, pp. 337-338. 邦訳, I, 532-533頁。

$(w_1 + w_2)$ の消費財を消費する人間群は？ この社会学的問いは蓄積にとってどうでもよい問題ではない。拡大再生産となるように消費財を分配するためには、生産的労働者とことなる不生産的労働者・不労所得者の人間群が具体的に特定されなければならない。<sup>(4)</sup>

不生産的労働者は家内召使、屋外サービス労働者、公共召使からなる。ミスが中味を具体的に特定しているのは後二者である。

屋外サービス労働者……文士、演劇俳優、人形芝居師、道化師、音楽家、オペラ歌手、オペラ踊子、法律家、医師、等々。

公共召使……主権者（君主）、君主の召使、宮廷人、司法・行政の大臣・官吏（外国・植民地をふくむ）、陸海軍人、国教会聖職者、等々。

家内召使と屋外サービス労働者はその労働にたいして私人から報酬を得る。これにたいして公共召使はその労働にたいして公収入から報酬を得る。公収入は国家の租税収入であり、その税源は究極的には労働者・資本家・地主の所得に、賃銀・利潤・地代にある。これら公私の報酬の源泉となる所得は「人民が（国家に——筆者・以下同様）割愛しうる収入」<sup>(5)</sup>であり、「なくてもすませられる収入（一余分収入）」<sup>(6)</sup>である。

不労所得者については不生産的労働者との区別があいまいであり、ミスのまとまった記述はないが、各所に散見する記述を参考にすれば、次のように推定してもまちがいなからう。

不労所得者……範疇としての資本家・地主（「一物をも生産しない（で奢侈品を消費する）怠惰な人々」<sup>(7)</sup>）、高利貸、年金・恩給・公債利子で生活する人々、<sup>(8)</sup>富者の家に滞在する「客人」、病弱者・禁治産者・救貧法対象者、受刑者、病院隔離患者、等々。

以上の多彩な不生産的労働者群・不労所得者群によりも、生産的労働者のほ

(4) J. ポズワエル『サミュエル・ジョンソン伝』や『フランクリン自伝』は、非生産的労働者群の実態を知るのに恰好な同時代の証言である。

(5) WN, Vol. 1, p. 342. 邦訳, I, 539頁。

(6) WN, Vol. 1, p. 333. 邦訳, I, 526頁。

(7) WN, Vol. 1, p. 294. 邦訳, I, 471頁。

(8) WN, Vol. 1, p. 338. 邦訳, I, 533頁。

うに消費財の分配割合を大きくすること、前年度の成果である年価値のうちの生産的労働者維持部分を今年度において増加させること、これが蓄積の主要契機である。

「(生産的労働者・不生産的労働者・不労所得者を扶養する年々の)この生産物は、たとえどれほど大きかろうとも、けっして無限ではありえず、一定の限界をもってにちがいない。それゆえ、ある年に不生産的な人手を扶養するのに使用されるこの生産物の割合が小さいか大きいかに応じて、前者のばあいにはより多くの生産物が、また後者のばあいにはよりすくない生産物が生産的な人手のためにのこされるであろうし、したがってまたその翌年の生産物もそれに応じて大ともなり小ともなるであろう、というのは、年々の全生産物もしわれわれが大地の自然発生的な生産物を除けば、生産的労働の成果だからである。」<sup>(9)</sup>

mは資本家と地主の収入価値に分解する。地代が追加の生産的労働維持費になるとすれば、その部分は、借地料の名目のなかにふくまれている利潤部分である。スミスの地主は土地改良や補修のための資本投下をするから、その投下資本にたいする利潤を地主は農業資本家から地代名義で受けとる。だから蓄積基金となるのは利潤としての地代であって、本来的地代ではない。また、直接に蓄積をおこなう人物は資本家としての地主であり、地主が地主のままで蓄積<sup>(10)</sup>に関係するばあいは他の論理次元——奢侈的支出論——においてである。

賃銀は蓄積基金となるか。範疇的には、賃銀収入が資本化されることはない。しかし、後段で展開される論理を先取りしていえば、賃銀のある部分は実際には蓄積基金に転化されうる。資本蓄積が労働力供給以上に不断に進展すれば、労働者は生存費・世帯費をこえる高賃銀を獲得する。高賃銀は賃銀の最低率(自然率)以上の「余分収入」をふくむ。労働者はその余分収入の一部をもって、他の資本家や地主とおなじように、生産的労働者を維持しうるし、不生産的労働者を維持しうる。発展的社会では労働者は資本家社会の一員に、そし

(9) WN, Vol. 1, p. 332. 邦訳, I, 524頁。

(10) ブルジョアの地主との最終的闘争はリカードにまでもちこされる。

て、生活水準の高いひとかどの社会成員に成り上がりうる。<sup>(11)</sup>とはいっても、やはり、以上のことは付随的で例外的であるが。

蓄積主体に密着して蓄積を考察すればつぎのようになる。資本家の個人的立場からすれば、追加資本とされるべき $w(a)$ 部分は直接には消費を禁欲することによって形成される。個人的消費の禁欲、このことは最初の資本を創造するばあいにも必要であった。いやそのばあいにこそ必要であった。では、本源的資本の形成と追加資本の形成はどこで区別され、どのように関連するのか。

本源的資本は非資本家が長期にわたって節約をつづけることで形成され、その間、資本は蓄蔵貨幣形態をとる。これにたいして、追加資本は資本家が一時期の節約をすることで形成され、資本は蓄蔵貨幣形態をとるとしても瞬間的にのみである。(この資本制的蓄積のばあいにも実際には資本は蓄蔵貨幣形態をとることがある。固定資本は長期にわたって資本回収されるから、新規更新がなされるまで償却価値は積みたてておかねばならない。しかし、スミスはこの点を理論的に考察していない。)本源的資本は将来の利潤獲得を目的として形成され、小生産者は、資本投下に適当な額となるまでケチケチと節約をつづけた。このことは歴史的事実である。ところでスミスが本来問題にしたのは資本制的蓄積である。本源的資本がその機能をはたしたあとで再び資本として、しかも増殖した資本として復活することが本来の研究対象である。資本家は利潤を全額個人的に消費しても、つまり節約の努力をしなくても、最初の本源的資本を確保することはできる。他方、本源的資本価値以上の追加資本は資本家による消費の禁欲をまたねば形成されない。このことは本源的資本の形成のばあいとおなじである。問題は、形式的にはともかく、実際には、本源的資本価値を維持するばあいでも資本家の節約努力は必要になるということである。それはどういうことか。資本家はぜいたくすることを許される。奢侈的支出は資本家の社会的信用をつくるうえで、必要経費でもある。資本の論理が許すぜいたくは、しかしながら、その許容範囲をこえがちである。必需品への支出は胃の腑

(11) Cf., *WN*, Vol. 1, p. 333, *ibid.*, Vol. 2, pp. 564-565. 参照。邦訳, I, 526-527頁, 同, II, 841-842頁。

の大きさにしばられるが、社会的価値評価をもとめるための奢侈品への支出にはかぎりが無い。その支出は本源的資本価値までも侵食しかねない。合理的な奢侈が資本家に要請されるが、彼の胸では享楽欲望と禁欲とが拮抗する。資本制的生産の結果である資本価値も剰余価値も、放っておけば自然と、次の資本制的生産のための前提になるのではない。資本家の立場からすれば、つねに禁欲していないと、蓄積はおろか資本価値すら維持できなくなる。

スミスは言う「儉約家が年々に貯蓄すれば、かれは貯蓄したものによって、その年またはその翌年のための生産的な人手の追加数を扶養するばかりではなく、公設の仕事場の設立者のように、将来いつでも同数の人々を扶養するためのいわば永久的な元本を設定するわけである。実際のところ、この元本の永久的な割当や使途は、必ずしもつねになんらかの成文法や信託権または永代寄付行為によって保護されているとはかぎらない。とはいえ、それはきわめて有力な原理によって、つまりその分けまえがいつまでも属するであろうあらゆる個人の平明で明白な利害関係というきわめて有力な原理によってつねに保護されている。この元本のどのような部分も、その後は生産的な人手以外のものを扶養するためには全然使用できないのであって、このようにその本来の使途をふみはずして悪用すれば、その人は必ず明白な損失をこうむるのである。」<sup>(12)</sup>

ここで言われている「永久的元本」perpetual fund の実質は、最初の生産的労働者維持価値  $W(A)$  である。それが永久的なわけは、 $W(A)$  は生産的労働者によっていったんは消費されるが、それは生産過程で剰余価値をともなっかならず再生産されるからである。生産的労働は最初の元本  $W(A)$  を絶えることなく生みだす。<sup>(13)</sup>

この永久的元本はいかにして確立されるか。

(12) *WN*, Vol. 1, p. 338. 邦訳, I, 533-534頁。

(13)  $W(A)$  の永久的元本性格を正確に理解していたのはテュルゴーである。彼が『百科全書』第7巻に寄稿した「財団」Fondation の項目をみよ。 *Oeuvres de Turgot, nouvelle edition, publiées Eugène Daire. Tome 1, Paris, 1844, pp. 299-309.* 邦訳ではつぎのものがある。津田内匠『テュルゴ経済学著作集』, 岩波書店, 1962年, 33-40頁。なお、フーコーがテュルゴーの理解を正確にうけとめているのは興味深い。ミッシェル・フーコー, 神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』, みすず書房, 1969年, 38頁。

一つは蓄積によって。利潤を全額個人的に消費して単純再生産をつづけるとしても、 $W(A)$ は保持されるだろう。だが奢侈的浪費への渴望は無限である。 $W(A)$ の保持は $w(a)$ を個人的消費から保持することによってより確実となる。追加資本の形成は本源的資本の保持のための外堀である。

他の一つは自由によって。国家的叡知や博愛的公共心によって管理されなくても、また法律によって外側から強制されなくても、人間は利害に誘導されて $W(A)$ を保持する。スミスの経済人は享楽衝動に打ちかって資本制的経営に邁進する。彼の経済人はその合理的行為に自己の利害があることを自分で知っている。スミスはそのような経済人を信頼する。

蓄積過程に生きる資本家の意識に内在してみよう。年々の蓄積によってその安全を確保される資本価値 $W(A)$ は資本制的再生産に捧げられる供物である。資本制的再生産は資本家にとっては日常生活での神である。 $W(A)$ に喰いこんで縮小再生産になるならば、その行為は神に嘉納されないことになる。

「浪費者はつぎのようにしてそれ（一資本）を悪用する。すなわち、かれは自分の支出をその所得の範囲内に限定しないことによって自分の資本を蚕食する。ある敬虔な財団の収入を瀆神的な目的に悪用する人と同じように、かれは、勤勉な人々を扶養するために自分の父祖たちが儉約していわば神にささげた元本から怠惰な人々の賃銀を支払う。」<sup>(14)</sup>

#### B. 蓄積の副次的契機

スミス蓄積論は個人的消費の節約論だけに狭められない。その節約を実質的なものにさせる行為、生産過程における生産的消費の節約、流通過程における貨幣経費の節約、奢侈的支出が蓄積におよぼす効果、を考察することが、スミス蓄積論の重要な範囲となっている。蓄積との関連であらたに生産手段の質と量が考察され、資本家の質が問われている。資本家には、たんに利潤の資本化をおこなう人格としてではなく、生産資本の実質的運用・徹底利用を遂行する経営者としての質が問われる。さらに、蓄積は拡大再生産であるから流通過程をそのうちにふくむ。貨幣は商品流通の媒介物として把握され、貨幣が資本価値を

(14) WN, Vol. 1, p. 339. 邦訳, I, 534頁。



貯蔵する意義は過少評価される。蓄積→拡大再生産→年商品の増大→流通貨幣量の増大。流通必要貨幣量を決定する法則はなにか、貨幣はどこからどのようにして補充されるか、流通機能に適合する貨幣素材はなにか、国家は流通の自由とどうかかわるか、これらのことが問題となる。以下、順次、考察する。

年生産物  $W'$  は物的には消費手段と生産手段とからなる。このことが蓄積の全体過程を描くさいの出発点になる。生産資本は現実には可変資本のみでなく不変資本からも成る。スミスは彼の命名する「流動資本」のうちで、貨幣をのぞいた他の三つ、食料品・材料・完成品（用具・機械等の固定資本をふくむ）<sup>(15)</sup>をあらたに「勤労を活動させる元本」と名づける。食料品は狭い意味での労働維持資財である。これにたいして、原料・用具・機械等は労働者の労働を具体的に生かすのに必要な、広い意味での労働維持資財である。狭広双方の意味の資財をあわせて、労働活動資財と名づけよう。

「ある社会の流動資本が雇用しうる勤労の量を算定するばあい、われわれはつねに流動資本中の食料品、材料および完成品の部分だけを考慮すべきであって、貨幣部分、つまり右の三者を流通させるのに役だつにすぎぬ他の部分は、つねにさしひかれなければならない。勤労を活動させるためには、三つのものが不可欠なのであって、すなわち、加工される材料、作業するための道具、作業の目的となる賃銀または報酬、<sup>(16)</sup>がこれである。」

さて、節約によって資本がつくられるのみでなく、その資本によって購買された労働活動資財が実際に機能しなければ、資本ははじめからつくられなかったも同然である。資本家は地主や高利貸のように所有に安住できない。彼は企画・生産指揮・生産管理・市場調査等の全領域にわたって<sup>(17)</sup> 慎慮を要求され、生産資本の良好な経営 **good conduct** を要求される。以上の意味での実質的な蓄積行為は労働力と生産手段の両側面から考察されている。

(15) *WN*, Vol. 1, p. 292 邦訳, I, 468頁。

(16) *WN*, Vol. 1, p. 295. 邦訳, I, 473頁。

(17) **good conduct** を大内は道徳的な「善行」と訳しているが、それでは経済的な内容が十分に伝わってこない。明治以来の邦訳のうちでは竹内謙二訳（「堅実なやり方」）がもっとも内容にちかい。

資本家は蓄積によって以前よりも多くの労働者を雇用する。その資本家は他の資本家に負けないように競争して分業を導入する。一般に労働維持資財  $W(A)$  が多くなるほど、分業は細分化され多様化される。職種の技術的理由によって工程別分業が、あるいは精神労働・肉体労働という分業が導入される。分業は労働生産力を向上させ、分業を導入しない場合よりも、同額量を産出するのにより少い労働者で足りる。 $W(A)$  は節約される。

蓄積は年々に購買される生産手段  $W(p_m)$  を増大させる。生産手段は機械・用具・原料からなる。資本家は生産力をあげるために自分自身で機械の改良を試みるし、新規購入のばあいでも、ヨリ改善されていてしかも安いものを求める。<sup>(18)</sup> 新機械は旧機械よりも多量の原料をムダなく消費する。分業とともに優秀な機械が導入されることによって、加工されるべき原料は飛躍的に増加する。

安価で優秀な機械を生産すれば、蓄積とおなじ効果がうまれる。「固定資本の目的は労働の生産諸力を増進すること、いいかえれば、同数の労働者がはるかに多量の仕事をなしうるようにすることである。……どのような種類の固定資本でも、そのために適切についやされた経費は、つねに大きな利潤とともに払いもどされ、しかも年々の生産物の価値を、このような改善のために必要な維持費よりもはるかに多く増加させる。ところが、こういう維持のためにも、やはりこの生産物の一定部分が必要なのである。そこで、食・衣・住、つまりその社会の生活資料や便益品を増加させるために直接使用されていたかも知れぬ一定量の材料と一定数の職人の労働との双方は、なるほどひじょうに有利ではあるが、やはりこれとは異なる別の用途に転用されるのである。まさにこの理由から、同数の職人が従来ふつうとされていたものよりも安価で単純な機械類を用いて等量の仕事をしうるようにする機械学上のいっさいの改善は、つ

(18) スミスにあっては機械改良者は資本家のみではない。小生産者や補助労働者も機械改良に熱心である。第1篇第1章分業論で紹介されている少年の例をみよ。おはじき遊びをしたかった遊びざかりの少年、ハンフリー・ポッターが、ニューコメン蒸気機関を改良したという逸話を、スミスがまじめにとりあげているところの叙述はユーモラスである。逸話の内容については次のものが紹介している。A・サトクリフ、A・P・D サトクリフ、市場泰男訳『エピソード科学史』IV、1972年、社会思想社、164-165頁。

ねにあらゆる社会にとって有利だと考えられるわけである。従来はもっと複雑で高価な機械類を維持するのに使用されていた一定量の材料と一定数の職人の労働とは、その後になると、こういう機械類またはなにか他の機械類だけが有用であるような仕事の量を増加させるために充用しうることになる。<sup>(19)</sup>

生産手段生産部門〔Ⅰ〕で機械を安価に生産することから生ずる経費の節約は、消費手段生産部門〔Ⅱ〕における生産資本を増加させ、消費財をヨリ多く生産させる。このことは社会的にのみでなく、一企業内にも妥当する。機械それじたいは消費財ではなく、機械生産の目的はあくまでも消費財生産におかれる。スミスの眼は部門〔Ⅱ〕用の生産資本増大にむけられる。

蓄積することにはならないが蓄積にとっての安全弁になること、それは生産的労働維持元本  $W(A)$  を保持することであった。だが、たんに生産的労働者を確保するだけではだめである。その生産的労働者を使用して生産にあたる企画が、成功のみこみをもつものでなければならない。たとえその企画が国民的で公共博愛的であるとしても、市場や経済の論理を無視した経営をすれば、そのばあいの資本は生産的労働の維持に転用されたこととおなじ結果になる。

「不始末の結果は、しばしば浪費のそれと同じである。農業、鉱業、漁業、商業または製造業におけるあらゆる無分別な、成功のみこみのない企画は、浪費と同じように生産的労働を扶養することになっている元本を減少させる傾向がある。こういったあらゆる企画においては、たとえ資本が生産的な人手だけによって消費されるにしても、かれらの雇用方法が無思慮なのであるから、かれらは自分たちの消費の全価値を再生産せず、さもないばあいには社会の生産的な元本になったであろうものを、つねに多少とも減少させるにちがいないのである。<sup>(20)</sup>

蓄積の全体過程を構成する部分過程のうちでのこされているものは流過程

(19) WN, Vol. 1, p. 287. 邦訳, I, 461頁。

(20) WN, Vol. 1, pp. 340-341. 邦訳, I, 536-537頁。misconduct は「不始末」と訳すよりも「放漫経営」(→ mismanagement) と訳したほうがその内容に近い。1780年代のスコットランド漁業問題にたいするスミスの答が、この放漫経営批判にすでにあらわれている。

と消費過程であるが、それらの考察にはいるまえに再確認すべきこと・補足すべきことがある。

第一。蓄積の直接的契機は節約にあるが、節約すべきものは生産的労働によって生みだされる。蓄積の究極原因は労働にある。(それも、搾取された労働にある。)

第二。追加資本はそれを形成した本人が使用してもよいし、他の資本家に貸付けて使用させてもよい。いずれにしても社会全体として蓄積は進展する。<sup>(21)</sup> スミスのいう貸付人は主として産業者であって、ステュアートのな不労所得階級・地主ではない。

第三。追加的に需要される労働者と生産手段はどこから補充されるか。蓄積の進展によって高賃銀を獲得した労働者はそれをもって以前よりも多くの生活資料を購入する。労働者の家族扶養能力は高まり、子供の早死もなくなり、子供は大人になるまで成育できる。労働者はこの時点で労働需要の増大に応えることができる。しかし、増大しつづける労働需要に即座に応えるためにはどうしたらよいか。応えるべき労働者は他にいる。不生産的労働者という労働者が。スミスの叙述からは明白でないが、封建的家臣団や家内奉公人が主要な供給源である。<sup>(22)</sup> つぎに生産手段はどこから補充されるか。都市で生産される機械・用具のための原材料は、また都市で加工生産される衣食住品の原材料は、農村から補充される。逆に農村で使用される機械・用具は都市から補充される。また、消費財生産部門と生産財生産部門で使用される生産手段は後者からのみ補充される。

蓄積の全体過程を描くさいに忘れてならないものは流通過程と消費過程である。この点の考察にもどる。

まず流通過程について。スミス再生産論では市場の困難の問題はない。慎慮にもとづいて生産された商品はかならず価値実現されるし、生産者間の自由競

(21) Cf., WN, Vol. I, p. 337. 邦訳, I, 532頁。

(22) 参照。マルクス、大島清・時永淑訳『剰余価値学説史』(2)、大月書店、1963年、198-199頁。小林昇『小林昇経済学史著作集』I、未来社、1976年、265-266頁。大河内一男編訳『国富論』I、中央公論社、1976年、517頁。

争は需要にたいして過少生産することを許さない。貨幣はスムーズな商品流通を媒介するたんなる手段であって、商品流通の実質は $W-W$ となる。しかし、商品流通にとってそれがいかに経過的な存在であるにせよ、貨幣は必要である。蓄積・拡大再生産→年商品の増大→流通必要貨幣量の増大。この貨幣を用意するために社会は年々の富の一部を提供しなければならない。イギリスは金銀鉱山を所有しないから、自国の富の一部をもって貨幣素材を外国から購入する。また、社会が必要とする金銀貨幣は銀行が収集・維持するのだが、そのためにも社会は一定の経費を必要とする。そのうえ、貨幣じたいは消費物でも生産手段でもない。貨幣にかかる経費を減少させ、しかも流通手段機能はアップさせる一方で、生産資本を増大させ消費財を増産させることが、社会的に要請される。蓄積の観点から流通手段の質と量が問題となる。

スミスは重商主義を批判する。彼は交換価値の骨化した貨幣を批判し、生産の外から生産に干渉する流通の不当な優位を批判する。その一方で彼は、再生産と蓄積に関係するかぎりでの貨幣と流通を正当に評価し、それらを把握しなおす。その再把握においてスミスが流通の意義を強調するのは驚くほどである。一例を国内小売商業にとってみよう。スミスは言う。

「もし資本が、粗生産物または製造品のいずれかの一定部分を、それを必要とする人々の随時的な需要に適するような小口に分解し分割するのに使用されないなら、あらゆる人は、自分が当面必要とするよりも多量の財貨を購買せざるをえなくなるであろう。たとえば、もし肉屋というような商売がないなら、あらゆる人は、いちどきに、まる一頭の雄牛、またはまる一頭の羊を購買せざるをえなくなるであろう。こういうことは一般に富者にとって不便であろうし、貧民にとってはなおさらであろう。もし一人のまずしい職人が、いちどきに一月分とか六か月分とかの食料品を購買せざるをえなくなるなら、かれは、自分が資本として、職業上の用具とか、自分の店の調度とかに使用し、しかも自分に収入をもたらすような資財の大部分を、直接の消費のために留保され、したがってまた自分になんの収入ももたらさぬような資財の部分にしいてくりいれざるをえなくなるであろう。このような人にとっては、毎日毎日、

否毎時間毎時間にさへも、自分がそれを必要とするままにその生活資料を購入できるということくらい便利なことはない。こうすることによって、かれは自分のほとんど全資財を資本として使用することができる。かれは、こうしてより大きな価値をもつ所産を提供することができ、またかれがこういう方法でこの所産からあげる利潤は、小売商人の利潤として財貨にかけられる価格の追加分をつぐな<sup>(23)</sup>ってあまりがあるのである。」

小売商業は小売商業としての機能をはたすことで（分業！）社会的にはより多くの生産資本をつくることができる（蓄積！）。これは産業資本家が直接に蓄積<sup>(24)</sup>をするばあいと結果的におなじである。

流通が蓄積・再生産の視座から意義づけられるならば、流通に必要な貨幣量を規制するのも蓄積・再生産の視座からである。スミスはグラスゴー大学時代の貨幣数量説的立場をすてて、『国富論』段階では、商品価値が流通必要貨幣量を規制することをハッキリ認識する。

「貨幣の唯一の用途は、消費財を流通させることにある。それを媒介として食料品、材料および完成品が売買され、その本来の消費者に分配される。それゆえ、ある国で年々に使用される貨幣の量は、その国内に年々流通する消費財の価値によって決定されざるをえない。この財貨は、その国自体の土地と労働の直接の生産物か、またはこの生産物のある部分で購買されたあるものかのいずれかであるにちがいない。それゆえ、消費財の価値は、この生産物の価値が減少するにつれて減少せざるをえないし、またそれとともにこの財貨を流通させるのに使用されうる貨幣の量も減少せざるをえない。……これに反し、どのような国でも、年々の生産物の価値が増加すれば、それにつれて貨幣の量も自然に増加せざるをえない。その社会のなかで年々に流通される消費財の価値が

<sup>(23)</sup> WN, Vol. 1, p. 361. 邦訳, I, 562-563頁。

<sup>(24)</sup> 国内卸売商業は農工分業の深化をうながし、農工両部門での再生産を確実にする。卸売商業は間接的に産業資本の価値再生産に貢献する。Cf., WN, Vol. 1, pp. 376-377, 362-363. 邦訳, I, 583-584頁, 564-565頁。同様にスミスは分業・労働生産力・再生産の観点から外国商業を評価する。重商主義の原理・貿易差額論を批判するところでスミスが外国貿易の「偉大で重要な任務」を説いているのは面白い。Cf., WN, Vol. 1, pp. 446-449. 邦訳, I, 668-672頁。

大きくなるから、それを流通させるためにより多量の貨幣が必要になるであろう。<sup>(25)</sup>」

いずれにしても貨幣は必要であり、社会はその貨幣の生産・収集・維持に経費をかける。もしもその経費が節約できるならばどうであろうか。その節約分は生産資本に繰り入れることができる。貨幣が流通手段の機能を純粹にはたす存在になればなるほど、それは生産に刺激を与える。そのような社会的観点から蓄積過程を把握するところが、あの特異な標題をもつ第2篇第2章である。その標題は、「社会の総資財の特殊部門と考えられる貨幣について、すなわち国民資本の維持費について」である。

スミスはまず、貨幣を機械等の固定資本に同一視する。そして貨幣経営を社会にまかせ、国家の活動範囲を規制しようとする。貨幣は以下の主として二つの点で固定資本に同一視される。

(i) 貨幣は高価であり、それじたいは生産の目的物ではない。

「ある国に流通する貨幣の貯え」<sup>(26)</sup>は、政府がその鑄造費を負担する。貨幣生産には「ひじょうに高価な材料、つまり金銀の一定量と、ひじょうに精巧な労働の一定量」<sup>(27)</sup>を必要とする。政府は最初の生産時にのみでなく、改鑄のさいにも高い費用を支出する。貨幣は流通するうちに摩滅するから、また私人のあいだで良貨の削りとりや熔解・輸出がなされるから、改鑄が必要となる。<sup>(28)</sup>

貨幣はそれじたいは金属であって、消費財でもなければ生産手段でもない。機械もそれじたいは消費財ではない。しかし、機械の目的が労働生産力を発展させて消費財を増産させることにあったように、流通貨幣の目的は消費財と生産手段を消費者・使用者に分配することにある。貨幣は個人的観点からは購置手段・支払手段・価値保蔵物であって、当事者にとってはなくてはならぬ価値物であった。しかし商品流通の社会的見地からすれば、貨幣は流通の用具であ

<sup>(25)</sup> WN, Vol. 1, pp. 339-340. 邦訳, I, 535-536頁。

流通は卸売流通と小売流通とに分けられる。二つの流通場における貨幣の質と量は第2篇第2章88パラグラフで考察されている。

<sup>(26)</sup> WN, Vol. 1, p. 289. 邦訳, I, 463頁。

<sup>(27)</sup> WN, Vol. 1, p. 289. 邦訳, I, 463-464頁。

<sup>(28)</sup> Cf., WN, Vol. 1, p. 284. 邦訳, I, 455-456頁。

る。貨幣の値うちは価値金にあるのではなく、それがその所有者に消費財を購買させうる力にある。スミスは貨幣名目説の立場にたつて重商主義的貨幣観を批判する。そして流通必要貨幣量の測定に資する考察をする。

社会の全員が1年間に獲得する消費財総額を1万ポンドとする。その額の消費財を流通させるのに1万ポンドの貨幣が必要か。否。同一貨幣片は1回にかぎらず何回もの購買・販売に使用されるから、貨幣の年間平均回転数を5回とすれば、1万ポンドの消費財を流通させるには2千ポンドの貨幣総額で足りる。当年度に流通する消費財総額のほうが流通必要貨幣総額よりも大きい。国富の大きさは、重商主義者のいうように貨幣総額によってではなく、貨幣によって流通される消費財総額によって、正確に尺度される。<sup>(29)</sup>

(ii) 貨幣経費の節約は生産資本を増大し、消費財を増産させる。

蓄積→拡大再生産→年総生産物増大→流通必要貨幣量増大。これにおうじて貨幣の維持と補充に必要な国家的・社会的経費は増大する。貨幣の維持費は、まったくなくしてしまうわけにはゆかないが、社会的純収入のそれだけの損失をもたらすから、社会的総資財の他の資本項目にくらべて少ければ少いほどよい。「流動資本」のなかの貨幣にかかる費用を節約して、その節約分を生産資本に転化すれば、それは固定資本の維持費を節約したばあいとおなじである。つまり、蓄積である。生産資本の蓄積の立場から、能率がよくて「より安価な商業用具」<sup>(30)</sup>がもとめられる。それは主として銀行券である。

<sup>(31)</sup> 発展した商業会社では商人・製造業者は経営のための資金をもとめている。商人は手持ちの商業手形をその満期前に銀行に譲渡し、銀行はその額面を割引いたうえて資金を貸付ける。ただし自行の発行する約束手形をもって。この割引額が貸付けにたいする利子であり、銀行の利潤となる。さて、その約束手形は持参人の請求しだいで現金を支払う証書であつて、銀行への信用が維持されるかぎり、それは金銀鑄貨とおなじ通用力をもちうる。現金支払をもとめて銀行

(29) Cf., *WN*, Vol. 1, pp. 290-291. 邦訳, I, 467頁。

(30) *WN*, Vol. 2, p. 943. 邦訳, II, 1362頁。

(31) 大塚久雄は信用と流通を再生産視座から編成しなおしてイギリス経済史を叙述した。



に還流してくる銀行券はその一部である。銀行は随時のその要求に応じるためにのみ、一定額の金銀貨幣を金庫に準備・補充しておけばよい。銀行は「はじめに貨幣を収集し、あとでそれを維持する」<sup>(32)</sup>のに一定経費を必要とするのだが、その内訳はつぎのとうりである。どの事業にも共通する経費として、家賃、使用人・事務員・会計係等の賃銀。銀行固有の経費として、金庫に最初に貨幣を収集するための経費、つまりその貨幣を貸してくれた者に支払う利子と、金庫をつねに一定貨幣額に維持するための経費。経費は以上のとうりだが、収入は、引受けた手形の満期日時にその手形振出人から支払ってもらふ額面である。

銀行券の発行はその国の流通必要貨幣量を節約する。スミスの数字例では、信用のある銀行は2万ポンドの現金を保有しておけば10万ポンドの約束手形を発行しうる。2万ポンドの価値保蔵物があれば、<sup>(33)</sup>10万ポンドに相当する流通手段が生ずる。その社会の10万ポンドの商品を流通させるのは10万ポンドの銀行券であり、社会が金庫に寝かせておかねばならないのは2万ポンドの金銀貨幣である。従来よりも少い硬貨でもって従来と同量の商品を流通させることができる。8万ポンドの貨幣は国内流通からはじきとばされ、その用途を海外に求めざるをえなくなる。国内に貨幣量が増加して商品価格が騰貴することはない。——機械論的貨幣数量説の批判。不必要な貨幣は海外に流出する。貨幣流出は貿易差額に不利だという図式はスミスのものではない。<sup>(34)</sup>銀行券発行による貨幣節約はなんのためか。これにたいする解答のなかにスミスの面目躍如たるものがある。

外国への貨幣流出はその用途によって三つに分類される。第1は、他国の消

<sup>(32)</sup> WN, Vol. 1, p. 289. 邦訳, I, 463頁。

<sup>(33)</sup> スミスは貨幣を批判して再生産論を展開するが、再生産にとって貨幣が必要不可欠となる事態を認識している。この点、注意が必要である。

<sup>(34)</sup> スミスはヒュームの貨幣数量説をのりこえる。ヒュームじしんは貨幣が連続的に各生産部門に好影響を与えることを見逃しておらず、単純な貨幣数量説信奉者ではない。究極的には貨幣数量説の立場にたつけれども。ヒュームについては *Political Discourses*, Edinburgh, 1752. の「貨幣」の項目をみよ。

<sup>(35)</sup> スミスは自分の流通必要貨幣論をもって、国内の貨幣不足を訴える重商主義者を批判する。参照、第4篇第1章15-19パラグラフ。

費者に供するための他国財貨の購入。貨幣は再輸出貿易に使用され、そこで獲得される貿易差額は自国商人のものとなる。第2は、自国の富者に供するための他国製奢侈品の輸入。輸入物品はブドー酒・絹織物等のぜいたく品—— $w_2$ に相当する——であり、不勞所得者によって消費される。このような消費への貨幣支出は浪費とおなじである。第3は、自国の生産的労働者に供するための他国財貨の輸入。これがスミス蓄積論の観点からすればもっとも合理的な貨幣使用法である。輸入物品は「食料品、材料および完成品」<sup>(36)</sup>であるから、それらは<sup>(37)</sup>勤勞を活動させる資材であり、「勤勞を促進させる」資材である。国内流通から節約された貨幣はそれだけの価値の生産資本—— $w(a)+w(p_m)$ に相当する——に転化する。「金銀貨幣のかわりに紙幣が代用されると、全流動資本が供給しうる材料、道具および生活資料の量は、これらのものを購入するのに使用されるのをつねとしていた金銀貨の全価値だけ増加されるであろう。流通と分配の大車輪の全価値は、これによって流通され分配される財貨に付加されるわけである。こういう操作は、ある大事業の企業家が、機械学上の若干の進歩のおかげでかれの旧式の機械類をとりはずし、新旧両機械類の価格の差額をかれの流動資本に、つまりかれが材料と賃銀とをその職人たちに供給する元本に、<sup>(38)</sup>付加するばあいの操作にある程度似ている。」

では、銀行券はどこまで発行しうるか。銀行券による貸付額の限度はどこにあるか。「ある銀行が、ある種の商人または企業家にどれほどの貸付をするのが適当かといえば、それは、商人または企業家の営業のための資本の全額ではなく、またこの資本のかなりの部分でもなくて、かれが貸付をうけぬばあい、随時的な請求に応じるため、寝かせたままの現金で手もとに保有させられるであろうその部分にすぎない。<sup>(39)</sup>」「ある商人が随時的な請求に応じるため、寝かせたままの現金で自分の手もとに保有せざるをえぬ資本部分は、死んだ資財にほかならぬのであって、こういう状態のままであるかぎり、それは商人のため

(36) Cf., WN, Vol. 1. p. 295. 邦訳, I, 473頁。

(37) WN, Vol. 1, p. 294. 邦訳, I, 472頁。

(38) WN, Vol. 1, p. 296. 邦訳, I, 474頁。

(39) WN, Vol. 1, p. 304. 邦訳, I, 485頁。

にもその国のためにも、一物も生産しない。銀行業の賢明な操作は、かれがこういう死んだ資財を活動的で生産的な資財に、すなわち、加工用の材料や、作業上の道具や、作業の目的である食料品と生活資料に、つまり、かれ自身とかれの国との双方になにものかを生産する資財に、きりかえることを可能にする。<sup>(40)</sup> スミスは要請する。すべてを生産資本に変換せよ。

銀行券の流通法則の科学的把握はそのままで、スミス自由主義の真髓を、自由と国家との関連を示す。スミスは俗にいう「自由放任」論者ではない。スミスの市民社会には市民的な「政府」が存在する。

「私人たちがよろこんで銀行家の約束手形を受領しているのに、私人たちにむかって、金銀の大小にかかわらず支払のばあいにはそうするのを抑制したり、あるいは、銀行家のすべての隣人がよろこんでそれらの手形をひきうけているのに、銀行家にむかって、このような手形を発行するのを抑制したりするのは、自然的自由の露骨な冒瀆であり、この自由を侵害せずに支持することこそ法律の本来の職分だ、という人がいるかも知れない。疑いもなく、このような諸規制は、ある点では自然的自由の冒瀆だとみなしうるであろう。けれども、全社会の安全をあやうくするおそれのある少数の個人の自然的自由の行使は、もっとも自由な政府であろうと、もっとも専制的な政府であろうと、同じように、すべての政府の法律によって現に抑制されているし、また当然抑制されるべきものである。火災の延焼をふせぐために隔壁を建造するのを義務づけることも、自然的自由に対する一種の冒瀆であって、ここに提案されている銀行業の諸規制とまさに同種のものである。<sup>(41)</sup>」

真の主権者は、消費的富の増産にむかう再生産体制にある。その主権者の普遍的利益を守るために、限定されたこの目的のためだけにのみ、法的執行人が存在する。慎慮という市民的英知にもとづいた自由が危機にさらされる緊急のばあ

(40) *WN*, Vol. 1, p. 320. 邦訳, I, 508頁。

(41) *WN*, Vol. 1, p. 324. 邦訳, I, 513-514頁。Cf., *ibid.*, Vol. 1, pp. 325-326. 同, I, 515-516頁。

スミスとおなじ精神で、前掲「財団」の執筆者テュルゴーは財団新設の自由に制限を課した国王の勅令(1749年)に賛成している。Cf., *op. cit.*, pp. 308-309. 前掲書, 39-40頁。

いのみ、国家強制力が執行される。国家は市民社会の意志の法的受託者であ  
 って、市民社会の上になつて、市民社会を指導する優越者ではない。<sup>(42)</sup>

スミスの経済人は銀行券発行・授受の法則に自己利害があることを自分自身  
 で判断しうる。それは、国家理性によって指導されなくても、自分で自分を統  
 御しうる自由人である。スミスの経済人はその自己統御能力を経験のなかから  
 獲得してゆく。このような自由人観からすれば、たとえそのプランは博愛的で  
 公共精神にみちたものであつても、銀行券発行法則を無視した放漫経営はけっ  
 してすすめられるべきものではない。<sup>(43)</sup>

蓄積の全体過程を構成する部分過程でさいごにのこつたものは消費過程であ  
 る。

生産は消費のためにある。この標語は、しかしながら、消費一般を、そして  
 奢侈的消費を弁護するためのものではない。弁護どころか、その反対に、直接  
 に生産的労働者を維持することにならない浪費的支出は、たとえその支出先が  
 国内であつて外国に貨幣が流出しないばあいでも、それは批判された。ところ  
 でスミスは産業資本の観点からのみ奢侈を合理化しようとする。彼の眼は公平  
 で、奢侈が生産一般に貢献するばあいを観察しているのである。この点ではス  
 チュアートの有効需要論と変わらないが、スミスに独自のことは、蓄積の観点  
 から奢侈の効用が検討されていることである。

年消費物の剰余価値部分のうちで不生産的に消費されるものは  $w_1$  と  $w_2$  であ  
 った。どちらの消費も直接には追加資本の形成にはならない。だが、その消費  
 様態を注意深く観察すれば、奢侈が社会的・間接的に資本蓄積に貢献するばあ  
 いがみつかふ。まず、問題となる奢侈的消費財についてスミスの言うところを  
 整理してみよう。

$w_i$  ……瞬間的消費財。地主や財産家は友人・仲間・客人・一族郎党を饗応

(42) 眞の主権者の意志を体現するかぎりでは「君主」の實在が許される。<sup>プリンス</sup>

(43) 1772年のスコットランド商業恐慌の経験がスミスの以上の認識をつくる一助とな  
 っている。なお、つぎのものはスミスがかかわつた当時のスコットランドを知るの  
 に不可欠な案内文献である。W・R・Scott, *Scottish Economic Literature to*  
*1800*, Glasgow, 1911.

する。このおおらかな饗応のために召使・従僕・犬・馬等が扶養され、食卓・什器・食料品等に支出がなされる。

$w_{ii}$  ……耐久的消費財。地主や財産家は自分自身の私的享樂のためにつきのような物に支出する。邸宅・別荘・宮殿の装飾、壮大な建築物、立派な家具・衣服・結婚ベッド、書物・絵画・彫像・記念物・その他珍奇なもののコレクション、宝石・ダイヤモンドつきのバックル等の金びか物・精巧な小間物、等々。

スミスは $w_i$ へよりも $w_{ii}$ への支出のほうが蓄積にとって有利であると言う。どのようにして有利か。瞬間的消費財 $w_i$ に支出された価値は「影も形ものこらぬであろうし、……完全にあとかたもなくなってしま<sup>(44)</sup>うであろう。」 $w_i$ は、<sup>(45)</sup>「その日の支出が他日のそれを軽減もしなければ補助もしないもの」であり、饗応のたびごとにつねに同額の支出が必要となる。これにたいして耐久消費財 $w_{ii}$ は、<sup>(46)</sup>それに価値を支出しても「耐久性のある、したがって蓄積できるもの」<sup>(47)</sup>であり、「毎日の支出がかれの好むままにその翌日の支出を軽減または補助」するものである。 $w_{ii}$ の最初の購入額は大きいとしても、次期からはまったく経費を要しないか、または追加的な補助経費のみですむ。そのうえ後者の経費は漸減してゆく。したがって、 $w_i$ よりも $w_{ii}$ を消費したほうが経費は節約される。この節約はブルジョア社会が資本蓄積をするうえで有益になるだろう。また、 $w_i$ への支出を削減しようとしても、社会的影響力が大きく、その実行は難しい。これにたいして $w_{ii}$ への支出は個人的な都合でやめることができるから、この点からみても、おなじ奢侈でも $w_{ii}$ への支出のほうが容易に経費を節約できる。以上の諸事例とならべて、スミスは、スチュアートと同様に奢侈が生産におよぼす好影響をも公平に評価している。奢侈品 $w_{ii}$ は資本制的商品であるから、財産家がそれを購買すればその価値は実現され、その生産にたずさわる資本家と労働者の所得が得られる。財産家の有効需要が、奢侈的消費が、間接的に生産的労働者を雇用することになる。そしてその消費が間接的に価値増加に役立つことになる。この意味で需要は一般に生産に刺激をあたえ

(44) *WN*, Vol. 1, p. 347. 邦訳, I, 545頁。

(45)(46)(47) *WN*, Vol. 1, p. 346. 邦訳, I, 544頁。

る。だが、くりかえすが、スミスはスチュアートのようにその作用を過大視せず、相対的にのみ評価する。この点、バランスのとれたスミス理解が必要である。

以上、蓄積の直接的契機・副次的契機において蓄積の諸部分過程を考察してきた。いずれの部分過程においても生産的労働活動資財は増大する。したがって年生産物価値も増大し、合理的経営や機械による生産力発展で年生産物量も増大する。蓄積は労働者の福祉とむすびつく。地位の差別と富の不平等にもかかわらず、蓄積が進展する社会の労働者は非蓄積社会のだれよりも富裕となる。いまだリカード時代の悲惨を経験していない明るいスミスの資本主義像。スミス蓄積論は彼の文明社会構想を理論的に検証する。

スミス蓄積論の全体過程は以上である。<sup>(48)</sup>

#### 結語

スミスの歴史は前方にむかって歩みつづける。しかし、この進歩史観は漫然と歴史をながめてもでてくるものではない。スミスは時代のなかで生きる人々に密着する。イギリス史において「もっとも多幸至福だった王制復古以来現在までの時期」<sup>(49)</sup>においてさえ、同時代人にとって文明は約束されたものではなく、むしろ文明の没落が切実に意識されていた。人々の心をとらえたのは国富と人口の減少であり、商業の衰退であった。革命、内乱、対外戦争、大火災、悪疫、公債濫発、これらによる一時的にしろ絶対的な富破壊が、資本減少が、歴史の表面をおおっていた。また人々は、着実な成功よりも浪費や冒険による破産を重大視し、貨幣資本の不足を国難だと感じていた。その国難打解のために、公共精神に燃える人々が種々の社会改革案を提出し、実践にとりくむ。スミスは人々の文明にたいする危機意識が真実であることを、そして社会改革事業にとびこむ人々の動機の純真さを認める。そのうえで彼は、視野を紀元前1世紀にまで伸ばして時代比較をおこない、社会が意識下に沈めていたことに耳を傾け

(48) *WN*, Vol. 1, p. 344. 邦訳, I, 542頁。

(49) スミス経済学説に内在する「経済表」を最初に発掘した研究者は越村信三郎である。同氏著『スミス経済学説』日本評論社, 1946年。岩波書店の浅井和弘氏から私は同文献のリコピーを送っていただいた。記して感謝する。

る。すると文明の危機にもかかわらず、国家と社会を存続させ繁栄させてきたものが発見される。それは人眼に触れにくい歴史の底流にたしかに生きつづけてきた市民社会である。資本蓄積に自分自身の利害をみいだす人々の営々とした営み、これが歴史のかまどである。市民的人間は地位への欲望を財産をつくることで、それも節約による資本蓄積と慎慮にもとづいた経営とによって、満たそうとする。見栄えはしないけれども人間本能であるこの利己的欲望が結果として編みあげたものが、本稿で解明してきた資本蓄積機構である。英知によるどんな改革プランよりも、歴史的経験がつくりだしてきた資本蓄積機構のほうが効果的に富を生産する。この機構は市民的人間の主体的営為にまかせておけば自然とつくられてゆく。このようにスミスが歴史の基底に市民社会を発見できたのは、彼が先進国イギリスに住んでいたからだけではない。イギリスの経験に安住するだけでは市民社会を認識することはできない。経験に安住するところからでてくるものはむしろ重商主義であろう。スミスは市民社会と人間を信頼するが、この信頼はけっして主観的なものではなく、危機をのりこえてきた市民社会と人間に歴史の案内役をまかせようとする純客観的な賭である。

スミスは市民社会を経済学的に把握する。その把握の営みそのものが重商主義国家批判であることはいままでの叙述から推察されるであろう。スミスは、国家的英知や博愛的感情よりももっと効果的に確実に、そして自立的に普遍的利益を実現させる市民社会を認識する。それも再生産論において、蓄積の全体過程の客観認識は国家批判を内在させている。

スミスは『国富論』を第5篇国家篇で終えている。だがこの体系編成は、国家という上部構造で市民社会を総括するというのではない。スミスにとって国家は市民社会よりも上位の優越者ではない。市民社会は排地的で無制限な私的自由の放任ではなく、社会的利益につながる個体的自由の体系である。市民社会は慎慮と正義のモラルを育てる。

もちろんスミスには、これまでの蓄積論においてもわかるように、国家は存在する。そして第4篇の学説・政策批判篇において、第5篇においてはとくに、市民社会にとって必要な各国家活動を展開している。ここで注意しなければな

らない。その展開はあくまでも歴史認識のうえにたったものである。スミスは社会のなかにとけこんでいた共同活動、たとえば和戦決定・裁判・教育・公共事業・財政等が、市民社会の発展のなかでいかに社会から分離していったか、その歴史的必然性を認識する。その認識のうえにたつて国家活動の価値がみとめられる。そして君主や宮廷の存在すらもみとめられる。これら国家活動・国家機関は市民的自由を保護するためのものであり、上から統制して支配するためのものではない。市民社会の脇に並ぶ国家。市民社会が発展すれば国家事務もふえ、当然に国家経費も増大する。豊かな市民社会と豊かな国家、「相対的に安価な政府」<sup>(50)</sup>。だが、スミスは、国家機構を膨脹させ、国家収入を増大させるために、租税源である市民社会の発展を企図したのではない。その逆である。また、市民的人間の慎慮の徳や自己利害判断能力よりも政治的人間の公共利害判断能力のほうが重要だと、スミスは言うのではない。両者は価値的にはすくなくとも同列であり、後者の政治的英知は市民社会の一般利害にとってもっとも緊急なばあいのみ執行を許される。政治はその限定された活動範囲にとどまるべきであり、第一、個々の経済活動にたちいる能力はないのである。市民社会はその正義維持のためにとぎとして法律による強制力を必要とする。しかし警察力の発動をまたなければ市民社会が成りたたないというのではない。市民社会の必要がまずあって、その必要にあわすためにあとから司法機構が整備されてきた。これが歴史的事実であった。だから整備された国家機構がないところでも市民社会はその生命力を実証してきた。西ヨーロッパの歴史がそのことを証明している。

『国富論』におけるスミスの政治家は、市民社会の普遍的利害を代表してこそ存在理由がある。この代表という理念を実現するものであるならば、その実在は貴族であってもよい。ということは、その貴族は、当時のジョージ3世を頂点とする実在の地主貴族ではなく、真の公的活動能力をもった自然的貴族でなければならないということである。この自然的貴族のなかに中・下層階級の

(50) 山崎怜氏の命名によるもの。山崎氏の一連の仕事はスミスにおける国家思想の意義をわが国のスミス研究者に注意させてくれた。山崎氏の功績を認めたくうえでなお問われるべきことがある。スミスの国家は資本蓄積の主体であったのか。



人間がどこまではいりこむか。スミスと民主主義的自己統御、この関連が問われねばならない。理念と実在の双方からスミスの国家論を把握することは、スミス市民社会論をより確実に理解することになるだろう。従来のように、スミスに単純に国家無用論をみたり、反対に保守的政治家像をみるのではなく、また安易に両者の並存をみるのではなく、国家と市民社会の区別と連関が問題として問われるべきであろう。スミス政治思想を正當に復位させるための新しい言葉が必要なきときである。